chapter.08

引用出典検索・読解とデジタル化

——曹洞宗学におけるデジタルアーカイブの活用

石井清純

1. はじめに

曹洞宗の教理研究において、1970年代に引用出典の検索と読解によって思想的展開を開明するという新たな流れが発生した。この研究方法は、その後の漢訳仏典のデジタル化の流れに後押しされ、飛躍的に展開し禅思想研究の主流となった。

また、『正法眼蔵（しょうぼうげんぞう）』の書誌的研究や、各地の主要寺院に残される「切紙（きりがみ）」資料の分類整理は、日本中世の宗教儀礼研究の分野においても注目され、その画像データの保存は今後の研究に大きく資するものといえる。本報告では、これらデジタルデータの蓄積の現状と展望について論じる。

2. 道元研究とテキストデータベース

2-1. 曹洞宗学の歴史と出典研究

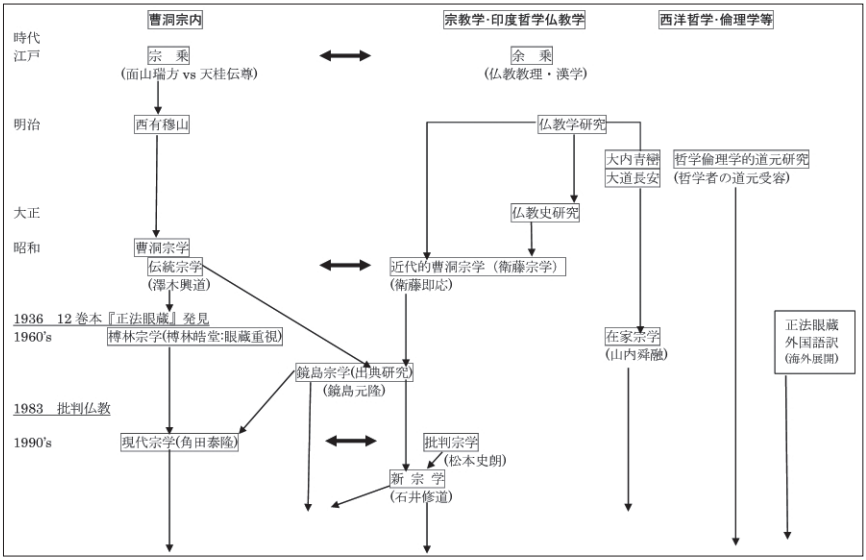
曹洞宗の教理研究は、江戸時代にはじまる。当初は修行道場内の学問所において、「宗乗（しゅうじょう）」と呼ばれていた。それが明治期に入り、宗教学、歴史学、哲学などの新たな学問分野の流入の影響を受け、さまざまに展開した。特に、道元の『正法眼蔵』研究は、その思想性から、哲学者に積極的に用いられるようになり、その解釈は、曹洞宗の宗典研鑽としての受容、学術的な仏教教理詩的位置づけに加え、哲学・倫理学からのアプローチという、三種に大別され、それぞれが独自に展開してきた。

近年は、さらに『正法眼蔵』の外国語訳の試みと、それにもとづく欧米における道元研究の展開を加えることができる。

「宗乗」は、1930年代に、仏教学・歴史学と融合する形で「曹洞宗学」として展開する。本報告の中心となるのは、その展開の中から、鏡島元隆『道元禅師と引用経典語録の研究』（木耳社、1965年）にはじまる出典研究を重視した流れである。それは、道元の思想を、著述に引用されている経論の出典を探り、その用法を分析することによって明確化しようという試みであった。この引用出典関係の精査は、道元研究のみならず、柳田聖山（せいざん）・入矢義高の、禅籍を超えた俗語研究の流れとも合流する形で、禅籍読解にあたっての基本的な研究方法として定着している。

なお、江戸期以降の曹洞宗学および道元研究の流れは、【表1】の通りである。

表1　曹洞宗学と道元禅師研究の流れ



2-2. 出典研究による思想的変遷の明確化の例

この出典研究によって道元の思想的特徴が明確化された一例として、「南嶽磨塼作鏡（なんがくませんさきょう）」の話を示しておくことにする。

この機縁について、道元禅師選述の真字『正法眼蔵』巻上・第八則は次のように記述している。

> 洪州江西馬祖大寂禅師〈嗣南嶽、諱道一〉参侍南嶽、密受心印、蓋抜同参。住伝法院、常日坐禅。南嶽知是法器、往師所問曰、「大徳、坐禅図箇什麼。」師曰、「図作仏。」師乃取一塼、於彼庵前石上磨。一曰、「師作什麼。」師曰、「磨作鏡。」一曰、「磨塼豈得成鏡耶。」師曰、「磨塼既不成鏡、坐禅豈得成仏耶。」(『道元禅師全集』巻5・128頁、春秋社〈以下『全集』〉)

この則は、『景徳伝燈録』巻五「南嶽懐譲」章に基づいているが、その原文の冒頭部分は以下の通りとなる。

> 開元中有沙門道一、即馬祖大師也、住伝法院、常日坐禅。師知是法器、往問曰、「大徳、坐禅図什麼。」一曰、「図作仏。」(以下略)(T51.240c)

これらを比較してみると、道元禅師は、原典には存在しない下線部八文字を追加していることがわかる。これは、そのほかの燈史や語録などにも見いだすことができない。つまり道元禅師が独自に付加したものなのであるが、この付加によって、馬祖は、すでに悟りを得た状態で坐禅をしていたことになる。この前提条件の変更によって、この機縁の主題が、「仏となるためには坐禅だけではいけない」ということから、「仏となるための坐禅はいけない」へと転換されているのである。

そして、また、道元禅師のよって立つ、修証一等が、南嶽懐譲・馬祖道一の時代より存在していたという、正当性の強調ともなっているといえよう[*1]。

このような例は、特に『正法眼蔵』において数多くあげられる。そのいちいちの内容はここでは問題としないが、かかる引用関係の探索は、研究方法が確立された当初は、まさに直接原典の文字一つ一つにあたっていくという、地道な作業の上に成立していた。その作業が、仏典・禅籍のデジタル化によって大きく変化することになったのである。

禅籍のデジタル化の嚆矢となったのは、管見によれば、ウルス・アップ編『Zen

Base CD 1』（花園大学国際研究所、1995 年）といえる[*2]。

このCDには、『大正新修大蔵経』所収の禅籍を中心に、主たる禅籍がJISコードのテキストファイルで収録されていた。特筆すべきは、編者のアップ氏が、原典参照の便宜を図りつつ、検索漏れを最小限に留めるため、『大正新修大蔵経』の一行の文字数を維持しながら、単語の途中で改行コードが入らないように、次行の句点までを行末に追加し、その文字数を行末に示すという形式を考案したことである。これは、当時「アップ形式」と呼ばれ、現在も、若干の改訂を経て多くのテキストデータベースに受け継がれている。

その後「大正新修大蔵経テキストデータベース」（SAT 大蔵経テキストデータベース研究会、1998 年）および「CBETA Chinese Electronic Tripiṭaka Collection」（中華電子佛典協会、1998）などによる禅籍のテキストデータベース化により、各種の横断検索機能を用いた出典引用関係の検索が容易となったことだけでなく、引用環形の明示されない祖述関係についても発見されるようになってきたことは、曹洞宗学のみならず、禅籍読解全般に関して飛躍的な展開ということができるであろう。

3. 曹洞宗典および関連史料と画像データベース

続いて、画像データベースと曹洞宗学との関連性について述べてみることにしたい。

曹洞宗関係の史資料において、画像データベースとしての保管によって、今後の研究の展開へとつながるであろう対象は、(1) 仮字（けじ）『正法眼蔵』の写本および刊本、(2) 中世仮名抄物、(3) 切紙（中世・近世）の三点である。それは、これらがそれぞれに、曹洞宗の教義的背景を示すのみならず、思想研究の学際化・国際化や、教団組織の展開と社会的背景を探る意味で、極めて重要な存在であることによる。

3-1. 仮字『正法眼蔵』

この資料については、①中世の古写本、②註釈書の写本、③近世の版本、の三点に分類できる。このうち、①古写本の重要性は、そのほかの禅籍と同様、

禅思想史を開明する上で重要な位置を占めている。

②の各種註釈書についても、多くが江戸寺代以降の選述で、まさに江戸時代に発生した「宗乗」の本質的議論の跡形を示すものとして重要である。これらは、①の古写本とともに、多くが『永平正法眼蔵蒐書大成』25 冊（大修館書店、1974~82。続編刊行中）において影印版が出版されている。デジタルデータとしては、駒澤大学図書館所蔵資料については「駒澤大学電子貴重書庫」（http://repo.komazawa-u.ac.jp/opac/repository/collections/?lang=0）に保管されている。

これらについては、そのほかの仏伝や禅籍と同様に書誌的、思想的に高い価値を有しているが、③の近世における仮字『正法眼蔵』の版本については、その資料自体が独自の性格を有し、その分析に資する画像資料の作成保管が極めて重要となっている。

仮字『正法眼蔵』は、近世まで、宗派により刊行を禁じられていた。それを、永平寺五十世の玄透即中（げんとうそくちゅう）（1729 ～ 1807）が、寛政 7 年（1795）に道元禅師五五〇回大遠忌の記念行事として発願し、文化 13 年（1816）に板行したのである。これが仮字『正法眼蔵』本山版（九十五巻本）である。

この編集は、道元禅師の仮名書きの著作すべてを、撰述示衆年代順に配列したものであるが[*3]、すべての巻が板刻されてはおらず、永平寺が宗義上重要とした、「仏祖（ぶっそ）」「嗣書（ししょ）」「授戒（じゅかい）」「伝衣（でんえ）」「自証三昧（じしょうざんまい）」の 5 巻については巻名のみ印刷され、本文は白紙となっているのである。当時の曹洞宗侶は、その部分を書写するために永平寺に拝登する必要があった。つまり、この時期に板行された刊本は、一部が写本となっている複合的な資料となっているのである。

無論、永平寺における謄写（とうしゃ）が基本であるゆえ、筆写時の写誤以外は、大きな相違の存在する可能性は低いが、この時期、ほかに多くの構成を持った『正法眼蔵』が刊行されており、その体系化が、新たな曹洞宗学の課題として取り上げられるようになっており[*4]、書き込みと書写、そして印刷部分の併存する「本山版『正法眼蔵』」の詳細なデータ保管は必須となってきているといえよう。

3-2. 仮名抄物

これについては、曹洞宗学、仏教学よりも、むしろ国語学の分野において注視され研究が進められている。曹洞宗としては、闇黒（あんこく）の中世と俗称されるとこ

ろでもあり、今後の研究が待たれるところである[*5]。

3-3. 切紙

この資料は、寺院独自の儀礼や作法、室中秘等を個別に記して伝承した資料である。内容は、伽藍配置や安居儀規などの叢林行事から、葬送・追善供養や祈禱法などの在家儀礼まで多岐にわたる。

具体的な内容分析は、石川力山『禅宗相伝資料の研究』（上・下、法蔵館 2001 年）およびそれに先立つ「中世曹洞宗切紙の分類試論」と題した一連の論考[*6]に詳しいが、それは、図像と解説文とが混在した極めて独自の形式を有している。【図 1】は石川力山「中世曹洞宗切紙の分類試論― 5 ―」（駒澤大学仏教学部研究紀要 43 号、1985 年）による翻刻の一例である。

図 1

このように、図像と伝授内容とが複雑に示されており、翻刻だけでは伝えることのできない情報もかなり多い。中には人権にかかわるデリケートな内容[*7]を含むものも存在し、無条件での公開には馴染まないが、研究対象として、ひとり曹洞宗のみならず、中世から近世にかけての寺院と周囲の人々との関係を直接伝える資料として、研究者間における共有は、極めて有意義なことであるということができよう。

4. 禅学研究の学際的・国際的展開――仮字『正法眼蔵』を中心に――

最後に、本科研の次世代的展開の一要素として、禅学研究の世界的な情報交流の試みについて報告を行うこととしたい。これは、【表 1】の右端に示した『正法眼蔵』外国語訳と大きく関連する。禅籍や漢籍の外国語訳は、英訳を中心に 1930 年代から行われてきているが、その中でも、日本独自の思想・哲学の代表として、仮字『正法眼蔵』の存在は大きい。

『正法眼蔵』および道元禅を紹介する書籍は、近年でも、翻訳は、棚橋一晃

訳（英語、サンフランシスコ禅センター、2010 年）、ドクショウ・ヴィラルバ訳（スペイン語、editorial Kairos、2015 年）、何燕生訳（中国語、宗教文化出版社、2017 年〈新装版〉）、フレデリック・ジラール訳（フランス語、進行中）などが上げられる。かかる動きに対応すべく、2017 年 7 月 11 日（日本時間）に、ネット会議ソフト appear.in[*8] を使用し「正法眼蔵国際読書会」と名づけた読書会を立ち上げた。その後基本的に隔週で仮字『正法眼蔵』の課題巻についての討論を実施しているが、2019 年 8 月現在の参加者の国籍は、日本、中国、フランス、ドイツ、イタリア、ロシア、スロバキアの七カ国に及んでいる。また、専門分野も、仏教学・禅学のみならず、倫理学、哲学、東洋史までも視野に入れた議論がなされているのが現状である。

禅籍の研究、特に日本の曹洞宗禅籍については、これまで取り立てて海外との連携を必要としないとされる分野であった。しかし、かかる状況にあって、新たな視座のもとに、学術的「鎖国状態」は解放されるべき時期にきたと判断することができるであろう。

この点に関しては、学術研究の対象として禅と向き合う研究者だけでなく、日本文化やその精神的背景に興味を持ち、その代表となるものの一つとして禅を実践する人々も増加してきており、そのような人々も視野に入れつつ、日本において積み上げられてきた研究を海外に展開してゆく活動が必要となってきているように思われる。これについては、まさにボーダレスなデータ共有を必要とするものであり、本研究の成果によって立つ展開ということになるであろう。

以上、資料のデジタル化の必要性と、そこからの展開の可能性を指摘することをもって、本研究の報告とさせていただく。

注

1　鏡島 1965、第 2 章第 2 項、「原文では修行の発足点と到達点が維持としてしまされたものが、同時として読み直されている例」p67 〜に詳しい。

2　花園大学国際禅学研究所のホームページ「組織概要」（http://iriz.hanazono.ac.jp/about_us/about_us00.html）を参照。

3　昭和 11 年に永光寺において発見された十二巻本『正法眼蔵』に収載される「一百八法明門」巻は、この当時未発見であったため輯録されていない。

4　2017年度に駒澤大学より秋津秀彰「江戸時代における『正法眼蔵』編輯史の研究（博仏甲第33号）」に対し、学位が授与されている。教団史および道元思想研究の展開を探る資料として、その編集形態が検討されたものである。

5　洞門抄物を扱った研究書としては、金田弘『洞門抄物と国語研究と資料』（桜風社、1976年）、樋渡登『洞門抄物による近世語の研究』（おうふう、2007年）などがあげられる。

6　『駒澤大学仏教学部研究紀要』第41号（1983年）に第1回が収録され、第23回が、同紀要第52号（1994年）となっている。ほかに『駒澤大学仏教学部論集』第14号（1983年）から24号（1993年）にかけて収録されている。

7　戒名による差別や、経血を穢れとする女性蔑視などがあげられる。

8　このウェブサービスは、2019年8月15日より“Whereby”と名称が変更されている。基本機能に変化はない。